神奈垣魯文編輯

佐賀電信錄

下

リ 5
5548
2

門り5
號 5548
巻 2

佐賀電信録下之巻

横濱　神奈垣魯文編輯

第五回

賊徒潰敗開城を議す
併征討總督の宮佐賀ふ發せ

夫那破侖の佛國ふ王れるや英邁世を蓋ひ材力凡を拔で國威を地球上ふ輝ゝ兵力を五大洲ふ振ふを以て名正しゝらぞと雖も創業三世ふ傳へ目今共和の國体と變ぜるも其黨絡繹として猶其偉勲を慕ふ者尠らぞ豈反黨の巨魁と等類うらん

や一度偽帝の名と下をも當時歐洲の文明皆此人の成功ふ出るを以て更ふ開化の先導と稱せ亦過たりと云可うらず曾て江湖の生才輕々進歩躬ら許て量度を過るゞ故ふ後年の失錯前功を消込ふ江藤嶋両氏の如ち勤王乃役大ひふ義氣を奮發し維新一統の方今一ハ上等四位ふ叙し官職參議大臣ふ列し一ハ中等四位ふ從し賞典生前を凌ぐ至重至大の朝恩を顧ず義務ふ托し自已の不平を愈さんの淺慮之を憂國と云うん乎之を至愚と

唱せんの論者宜く衆評を疑せよ閑話休題佐賀の賊兵官軍日を追て進擊し之ゞ爲ふ屢敗績ふるを以て迎戦の勢ひかく橋ふ除き出兵を引退ゝせ城中の異論或ハ籠城説主張し或ハ恭順降伏を議する者ハ紛紜隔意を生じ密ふ脱走する者ハ日ふらずと聞へられハ廿六日ふハ東軍進んで神崎の賊ふ擊ち臺兵之ふ應援し翌廿七日ふハ総軍を三道ふ分ち境原驛ふ進擊する賊軍必死ふ決せし者此所ふ對陣して終日の戦争殊ふ烈しく弾丸箱

城拂へバ抜刀電光の如く死者狂ひ叫奮激突戰其矛頭當る可らず或ハ長鎗の人ハ觸るゝ揚枝飛燃乃体をなし接して彈丸ハ斃るゝあるを對ひて刀下の鬼となるゝ義ハ進ミ勇ハ走り臆して退くゝれを追擊度ハ過るあり故ハ父擊るゝ共回顧る閑暇なく兄倒るゝ共救助るの餘地なし此時賊を討取こと無數ハして官軍も又死傷ゝ然れ共猶進んで蓮池の賊を追ひ將ハ佐賀ハ逼らんとする も金烏西ハ傾き既ハ薄暮玉兎の飛搖する ゝ看る

ゝ爲ハ止まりて各隊野營を布き銃器ゝ組ミ夜襲の防禦嚴格なし巍々たる備へたり于時政府より佐賀及び接近乃諸縣へ如此布告ゝ

嶋根縣（出雲一國）濱田縣（石見一國）小田縣（備中備後）廣嶋縣（安藝）山口縣（長門用防）名東縣（阿淡讃岐）愛媛縣（伊豫一國）高知縣（土佐一國）長崎縣（肥前壹對）福岡縣（筑前一國）三潴縣（筑後一國）小倉縣（豐前一國）大分縣（豐後一國）佐賀縣（肥前九郡）白川縣（肥後一國）宮崎縣（日向一國）鹿兒嶋縣（大隅薩摩）

今般詮議の筋有之其縣於て陸海軍省及鎮臺の

用向を除の外平常免許者たり共銃砲弾藥類賣買運送共當分の内嚴禁候條此旨至急可相達事

明治七年二月

夫内外雜居の紛紜たるゝ政府我彼相共ゝ交際親睦一約各國公法ゝ出るも各民の間ゝ於る又然らざるの憂情を釀さゝ近世米國南北両部分裂して爭鬪交戰の折英國ゝ南部ゝ軍艦ゝ販賣せ一ば以て両部一和の後英米両國の間ゝ爭論起り既ゝ一て兵端ゝ開んとせ一を魯國之を扱ひ消く

ゝ和議成り英より米ゝ謝する償金ゝ以てせり是他ゝあらざ奸高同氣相求るの弊ゝ一て國害是より大ひなるハあ一とせん目今佐賀動揺の際長崎ゝ在留の外國人密ゝ夥多の「カードリッチ」乃ち早合せの彈藥ゝ賊軍ゝ販賣せ一ちと顯然たるよ政府之ゝ若干没入せらるゝ一ゝぞ

因て日前ゝ長崎港内外佐賀の擾亂ゝ賊徒縣廳を襲ひ權令岩村高俊の率る臺兵敗散せ一を聞き人心大ひゝ動揺せ一ゝぞ廿日午後三時當縣令川

房之より外國（コンシュル）則ち領事官に布告して
當地に害事なくぜと示せしに同日午後十時
に及び再告して叛徒既に逼らんとするの急報
あり故に市街洶々或は其資産を外國人の倉庫
に輸入して安全を託せ者あり此時外國（コンシ
ュル）及び港内に投錨せし外國軍艦魯西亞二艘
英米共に各々一艘の將校等直に會議して寄留
外國人の保護防禦をおさんと計策を盡せり然
るに間諜の賊徒等深堀其他に於て忽地捕縛せ
らるるに及ぶ港中の内外人等全く無事を得る
に至る

此時朝廷陸軍少將山田野津の両氏及び佐賀權
令岩村高俊其他士官兵隊へ慰勞として酒肴を賜
ふ

士官兵隊

佐賀縣賊徒為鎮静出張被仰附候處賊徒益々暴
を逞し候に付臨機の處分に及び格別盡力の段
感被為在候依之為慰勞酒肴下賜候猶此上奮

勵速ふ平定の功績可奏肯御沙汰候事

陸軍少將山田顯義
陸軍少將野津鎮雄

各通

佐賀縣賊徒益凶暴を逞し遂ふ官兵ふ抗し候ふ
自進討ふ戰ふ及候段 聚慮被為在候依之為慰
勞酒肴下賜候猶此上奮勵兵士を率ひ勵み速
ふ平定の功を可奏肯御沙汰候事

佐賀縣權令岩村高俊

佐賀縣賊徒肅集の報を聞き速ふ赴任暴焔を避
り説諭ふ及ひ候所却て彼の襲撃ふ逢ひ困難
ふ罹り候段苦勞ふ被思召依之為慰勞酒肴下賜
候事

同二十八日 官軍野營を拂て蓮池ふ陣城居へ境町
佐賀江一里半 まぐ進撃をるふ此日の戰ひ殊ふ烈く早朝
久保山嶺を攻むるふ賊兵山ふ倚り臺場を構へ眼
下代目途ふ打發つ大小銃砲雨の如く面を仰可き
透もあ〳〵ふ官軍毫も臆まる色なく布陣揉頭て
捕ふ代へ斃る〳〵味方を乗越へ踏越へ辛く〳〵て半

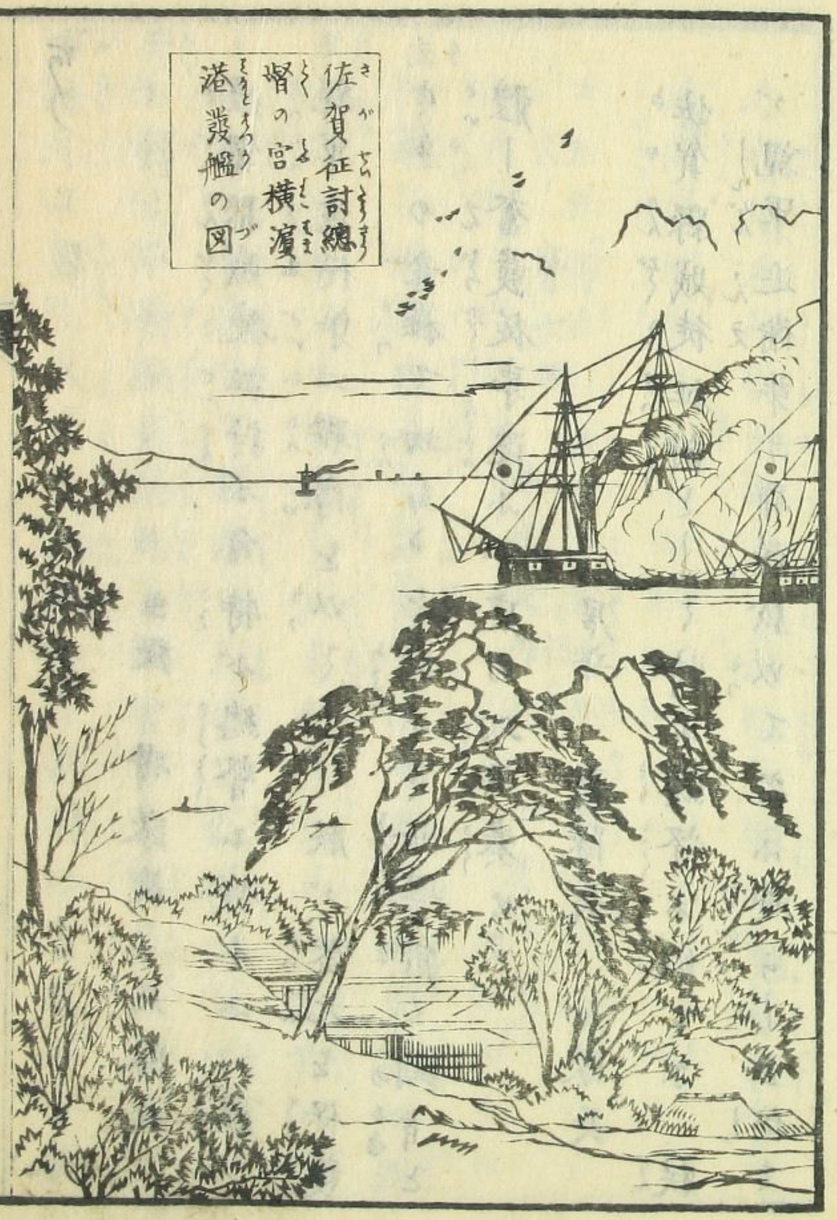
途ニ至リ師令達ハモ隊伍ヲ列シ大砲隊ヨリ連發の「カノン」の目的圖ニ叶ヒ賊隊亂れ彈丸の破裂ニ死傷夥シク殘兵何ウハ堪可ラン皆散々ニ逃去官兵臺場を乘取りて猶も進んで山上の敵試ンと登るを此手の隊長久留嶋某銃丸ニ當リ即死するより兵士散亂して遂ニ山林ニ火を放ち陣營悉く灰燼となせり此日午前四時井田陸軍少將廣島鎮臺兵三中隊を率ひて本營ニ着陣一同十二時三瀬越ニ出張せり然るニ味方昨夜よりの

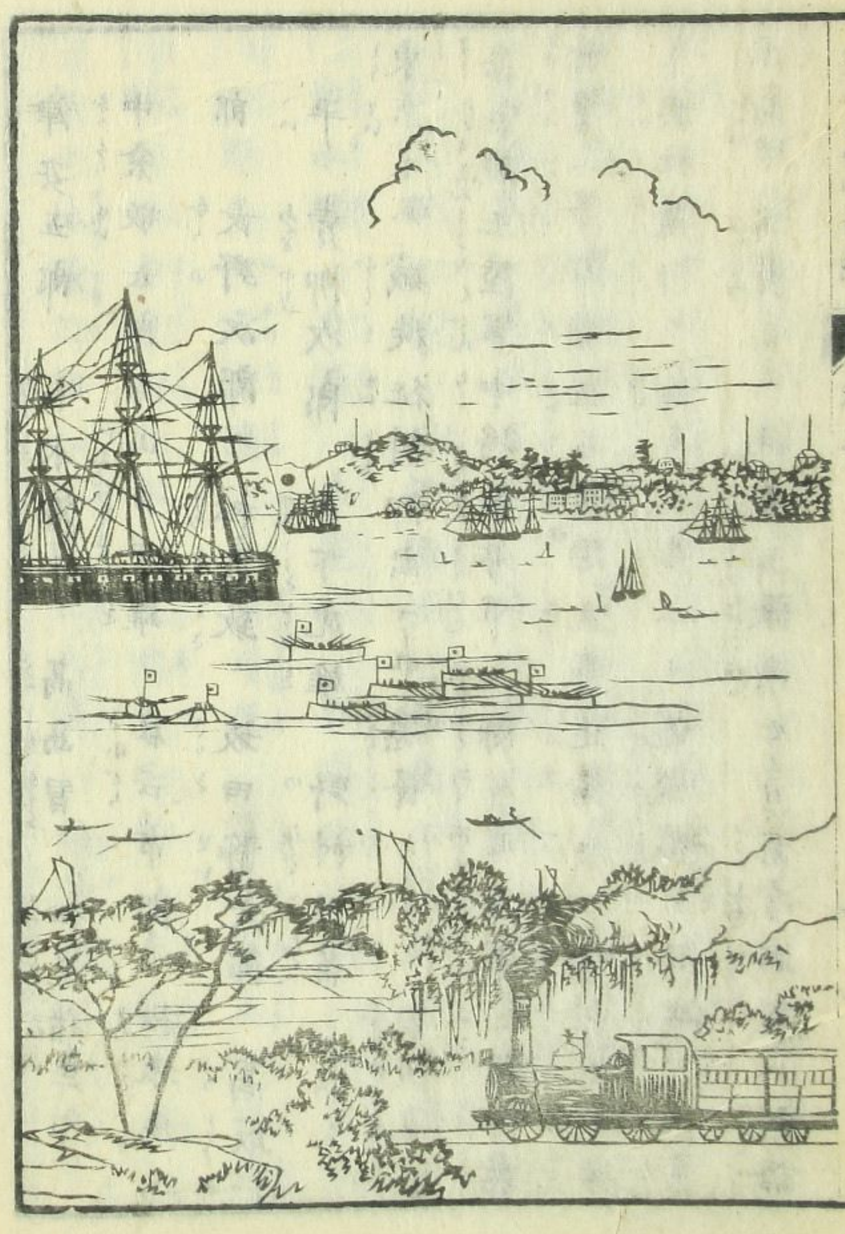
籌策成り疾くも此所を発取せり此とき城中より降旗を振り賊頭木原義四郎を總代とし尋て副嶋謙助亦來り謹て降伏を請ふが故ニ諸軍ニ令して休戦を傳へ其處分如何議せるニ彼の歎願の書面不都合ナル文意ニ因て其儘差戻されたるニ休戦三日ニ經て二月ニ日ニ成ル三日江藤嶋の巨魁を始め其他の賊頭夜を侵して遁亡せり且殘徒悉く城を開き軍門ニ降るを以て就縛を遂げ官軍直ちニ入城し脱賊の踪蹟所在嚴密ニ探索ありしが這

田の戦争ハ福岡縣より出兵せし貫属隊の死傷を
る都て三十九名にして其姓名を左に掲ぐ

戦死　幾嶋徳　樋口等　前田前　和田謹吾
矢柄至　箕原岩吉　濱地雷五郎　近藤政次
宮川夥一郎　古部龍吉　病院にて死する者
岸水従　手負　原寛一　船越政次郎　大畠太
七郎　帆足真穂　吉村増雄　濱井嘉三　吉村
林七　吉田勘次郎　荒井喜三郎　吉村九郎一
郎　林鐵之助　金澤良兵衛　梅澤盛太郎　岩

津安五郎　白水源十　高島習　松尾猪三郎
中倉敬太郎　山口友雄　谷口市郎　松本虎三
郎　長野次郎　松尾致　坂田静大郎　高取仁
平　青柳次郎　山下虎雄　野村田苗　以上
東京ハ賊徒征討仰出され總督として東伏見宮
嘉彰親王陸軍中将兼参軍山縣有明海軍少将伊藤
祐麿一等軍醫正石黒忠直等近衛兵二聯隊を引卒
し其他隨行の面々三月一日龍驤艦を解纜し佐賀
ハ向て出發ス此際出張併せて居守聯隊へ勅語


佐賀征討總督の宮横濱港發艦の図



出張　聯隊長　大隊長

佐賀縣賊徒征討ハ付特ハ總督ハ假モハ朕ガ親軍近衛第二聯隊を以テ　朕ガ黎元を保護セラルの意極テ切なるを明ハモ汝等能く期旨を體シ奮發従事速ハ平定の功奏せよ

居守　聯隊長　大隊長

佐賀縣賊徒征討トシテ特ハ總督ハ假モハ朕ガ親軍近衛第二聯隊以テ之ハ趣ウシムル仍テ

輦轂の下守衛一層能く心を用ひ勉勵従事セ

第六回　佐賀平定官軍入城の件　併賊徒降脱の二途に分れ

去る程ハ佐賀縣全く平定ハ仍テ内務卿を始め総軍擧テ三月一日入城シ此旨電信を以テ東京ハ奏シ各縣ハ布達シテ賊蹟の探索を嚴密ハシ諸軍の勞を慰セラル折柄岩村権令ハ倉ヨリ到着シ管下ハ布告シテ專ら人民を按撫セシ此時佐賀城中ハ賊

の遺文ありし曰

當今の御政體ハ皇國内患外憂相起り迚も
相治り候場合ハ相成間敷憂國憂民の至り建言
建白少からぬ同志相語らい會議ハ及候所一應
二應の御諭も無之突然鎮臺兵城中ハ御繰込相
成打拂の御手配ハ不止得戦争ハ及候城中の
士決死罷在候處今般嶋津從二位卿鎮撫の命を
被為蒙早速和田中山鹿児嶋人ハ從二位公の命を帯ひ来る者あり両
人昨日大久保内務卿へ談相成候ハ不止得戦相止候

右ハ不止得儀と存罷在候得共奉觸朝廷の御
嫌疑候次第今更奉恐入候此段申上候

二月廿八日　副島謙助木原義四郎其外

外一通ありし其文ハ曰

數百年來天下忠義の士自然と蝟集　天皇の御
仁德とハ申ハ又此輩の盡力ハて中興の
御大業ハ相成五方の人民目を拭て信賞必罰萬
機其所を得神世淳朴の風ハ復し候ハんと希望
罷在候處豈圖らん恩賞必ぞ顛倒し奸臣專ら横

ハり中興第一の元老島津從二位西卿正三位木戸從三位板垣正四位副島正四位後藤正四位其他有功の士を退け無功無頼の奸才を擧げ蠻夷の醜風ふ心醉し開闢以來未曾有の苛政暴法重歛相行ハれ外國の黠奴を親む父兄師友の如く華士族及び人民を待せバ讐敵の如く四海荒蕪怨嗟の聲路ふ充つ然りと雖も海内憂國の士尊王愛國の念より三條大臣岩倉大臣へ建白鮮うらむ兩大臣忠諫の心頗るなりと雖も才凡量

小ふして人を照せの明なく奸臣の為ふ愚弄を受け淺薄なる權謀詐術のみを施し天下の人心を失却し猥ふ殺伐の氣を起し忠諒なる肥前を始め肥後より〳〵元勲の薩州を伐ち土州ふ及バんとの結構今般肥後鎮臺兵を發し佐賀城ふ楯籠り全國の士族を擊ち掛る依之不得止全國忠勇の士ハ偖置無識の士民ふ至るまで忠憤ふ堪へず本月十六日早曉より攻立昨十八日朝まで攻落し暴兵打壞ひ申候先以て江藤正四位

其外と公平衆議の歸する所を以て適宜の處置
ふて四民安堵の樣取計ひ候ふ付き此上ハ内國
の大政を御改革被爲在外ハ不遲不禮の朝鮮國
を御征討被成候ハ勿論支那魯西亞の外こと
も我ふ臣僕と成る御目途被爲在候ハぐハ不相
濟第一度々両大臣へ懇々忠告候通り中興の諸
元老を厚く御慰諭の上御登庸内ハ御仁澤を被
爲施外ハ御武威を被爲張封建郡縣並び行候ハ
でハ迚も神州治り候目的決て無之候此段諸官

御報奏奉願候也

明治七年第二月　従四位島義勇

評ふ曰前條遺文の如き元來激發の暴意ふ出て
其旨趣の蛇足ふ頑固の賊情を知るふ足れり
然れ共嶋の如き勤王の役寸功あ―とせず且其
舊主の忠奮ふ浴―無量の皇恩を以て高位を
侵―一度廟堂ふ併列―巍然國務ふ従事せ―も
心裡舊弊と脱せず伎倆治安の材ふ―故ふ開明
の方今黙除其圖ふ叶ふ云免官束手ふるより微功

を頼み大ハに不平の意を生じ事を朝鮮に起し窮士を鼓舞し縷民を煽惑し以て其志を得んとす るの不義非道其所為狂妄にあらざれバ愚の又甚しき者と云ハん歟此人往日秋田縣権令奉職の際彼の地出發の旅装舊藩諸侯下國の如く有志者之を傍観し密に嘆息せしと云又義勇の性明友知己に對話する に暴謨の僻疾ありて常に曰僕が論説若不適當にして事に相違せバ其期首級を呈せんなど誇言せり適せる哉這回の逆謀悉く齟齬し果して首級失ふに到る豈奇なるかな

却説賊軍潰敗以後賊徒等悔後伏罪門を閉て謹慎まる者凡二千人其中間々脱逃せる者巨魁江藤新平其僕船田次郎及び且嶋義勇を始め石井竹之助山中一郎中嶋鼎藏香月桂五郎朝倉弾藏徳久幸次郎山田平藏中村林太郎江口松之丞中橋藤一田中七四郎荒木幸四郎小川清武副嶋謙助重松基右衛門横山萬里櫛山弥助江口村吉中嶋又吉牛島朝實

松永宗助同権次生田源八等（此他氏名未詳）數名あり故ゆ内務卿直ゆ四國九州其他城攝の間ゆ令して賊徒の踪蹟嚴重ゆ探索あり是より前山口縣ハ九州接近の地なるを以て賊徒等風ゆ出入して大ひゆ人心を煽動せしゆ為ゆ士民狐疑を抱き物議紛紜動もされバ沸騰の景狀なるゆより内務卿より左ハ通も布達あり

其縣の儀ハ九州接近ゆ附萬一佐賀縣下賊徒潛伏暴動し難測候條心得の為別紙の通相達し候事

第一條

人民の安寧を保全せしむる至仁の厳慮を體認し其旨を説示せ可き事

第二條

佐賀縣逆徒ハ官軍を差向られ迅速征討し其根を鋤去し再萌せざらしむるの朝旨なるを示諭し管下士民の方向を定め聊疑惑あらしむる事

第三條

佐賀縣逆徒管下へ逃走潛伏ヵ難測ヵ附嚴密取締若逆徒と見認るヵ於てハ猶豫なく逐捕縛其制ヽ難きハ臨時の處分不苦候事

但巨魁前參議江藤新平踪跡の儀一層注意を加へ見當次第捕縛すべき事

第四條

不得止時機ヵ至ると雖ハ貫屬士民を擧げ邏卒を編制ヽ臨時の處分允許せる事

偖ヵ巨魁の一個嶋義勇ハ逸疾くも城を出て副嶋謙助重松基右衛門其餘八名の賊徒等と同行ヽ谿間を潛り嶮岨を經て稍くヵ乘船ヽ辛くして鹿兒島縣ヵ着せしヵど當縣下ヵも天網の洩るゝヵを恐れバ爭ヵ寄る邊の涯ヵ便り藻魚の浮生を保んと滄滄浪々として三月七日の夜陰鹿兒嶋の城下ヵ至る時捕吏の爲ヵ見咎められ忽地逮縛せられたり此前日山田平藏生田源八牛嶋朝實松永權二郎の四名俱ヵ捕縛ヵ就きヽクバ當縣權令大山綱良よ

り佐賀の内務卿へ報知あり因て此旨東京ゟ電信を以て通ぜられしゝハ則ち廟議ありて正院より賊魁管轄の府縣廳へ左の如く布達あり

東京府

其府貫属士族嶋義勇儀賊臣ゟ與ヘ遁逃候所於鹿兒嶋縣就捕縛候追て吟味の上至當の御處分可有之候得共先位記を被流候條此旨相達候事

佐賀縣

其縣貫属士族江藤新平儀賊徒ゟ與ヘ遁逃候ゟ付捕縛の上至當の御處分可有之候得共先其位記を被梳候條此旨相達候事

明治七年三月

古語ゟ曰貧うしてハ智短し馬疲れてハ毛長し如此ぞ如何然り老てハ當ゟ益壯んなるべく窮してハ益固うるべきを小人の閑居もるや必ず不善を作す佐賀の士族等素餐の天祿ゟ飽き大義を唱へて非理を行ふ天網各身ゟ迫る此際虎口龍腮を幸く避け各地ゟ潛匿もるゞ中ゟ巨魁江藤新

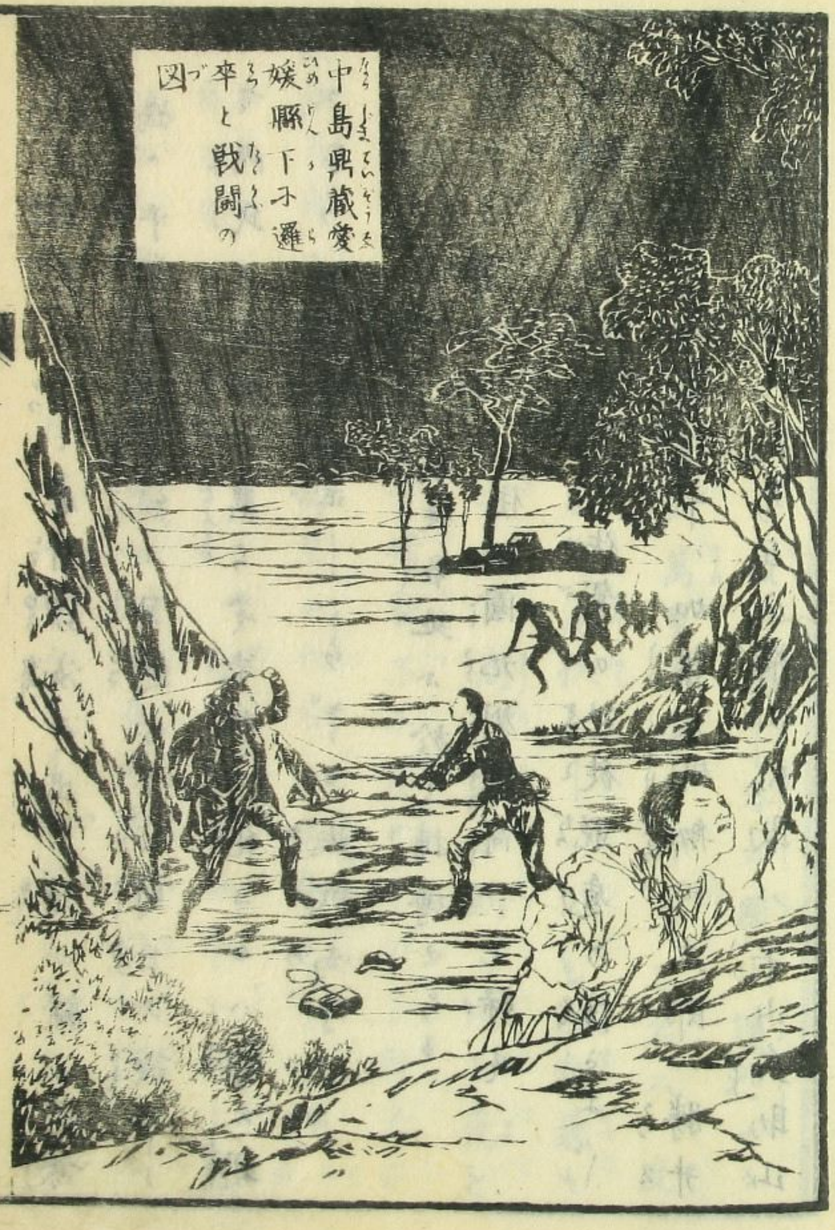
平ハ其従弟江口十作及ひ其僕船田次郎健ホ二人を従へ夜ホ乗じて遁亡せ一ホ途中香月桂五郎横山萬里中島又吉江口村吉の數名ホ邂逅せ一ハ此徒と共ヨ同行一海路鹿兒嶋ホ着せ一ヨ一先此地の動静を探偵せんと逆旅ホ宿り其景況を窺ホ當縣既ホ内務卿の命令を体一賊徒の踪蹟厳重の探索ヲれバ今ハ此地ホも止り難く第三日を経一其夜の中ホ宮崎縣下戸の浦ヨリ四國を指て渡海ヲ一稍くホ一て愛媛縣下宇和嶋ホ上陸せり然ルホ當地も捕吏巡廻密ホ一て管内要衝の地ハ勿論船舶出入の場所分境等警備の出張ホ一らざるハホ一殊ホ江藤ハ其寫真の影相を以て其容貌を看競ぶるの風聞ヲれを日下吾後影も捕吏の追迫せる歟と危懼一戦々栗々歩を促一晝ハ深嶺叢林ホ太陽を覆ひ夜ハ危險の山谷を徑行一携へたる革籠行李ハ幽谿峻河ホ没投一飢てハ草根木皮を食ひ餓一てハ殘雪溪水を飲一一同の困迫比せる者ナ一其中江藤年長ホて今春初老を越ルホ

他の青年等ハ氣力劣り殊ニ旧冬在京中ハ寸歩さ
りとも馬車ニ駕し壯舘ニ坐し義室ニ卧し玄冬三
伏の寒暑ニ觸れずあらゆる風ニも犯されざりしを
天魔悪鬼ニ魅せられん斯淺猿き落魄ハ但看る
屈原の放されて江潭ニ游び澤畔ニ行吟たるも斯
やらんと思惟せらるゝ顔色憔悴として形容枯槁
なり然れ共彼ハ世俗の塵埃ニ染まず三閭太夫の
名潔くして皎々の白きハ滄浪の濁水ニ混じて四位の記を汚せる暴動の魁なり噫我の渠ニ
恥る此一事反對の擧ある而已以て後昆の炯戒と
せるニ足る可し

因て云江藤氏曩日司法卿在官中新律を立て舊
法を改正せるの際罪人遁逃の期ニ臨み人相書
を以て捜索を遂んこと頗る迂遠ニ属せバ爾後
懲役所刑の場ニ影相の寫室を設け一々罪人の
容貌を寫真繪ニ製せらるべしとの内命を下せ
し事ありしとぞ然るニ今回の擧や其身大罪を
犯し脱遁せるより官其踪蹟を追ふニ江藤ニ遺

江藤主税峡
嶺を凌ぎて
高知縣へ遁
逃れ

中島兎蔵愛
媛縣下へ邏
卒と戰鬪の
図



影の寫真を以て走所謂汝か出て汝か歸る前條嶋か平常の誇言終か自適せると同日の談ふし て兩氏の未形か慮らず未兆か視ざるハ智の明うからざる性の正しうらぎる故歟嗚呼

賊徒各地か於て捕縛せらる

第七回

併西國九州方向一か歸る

窮士屢名を改むると佐賀の逆徒脱遁の後ゝまゝか變名せり江藤新平ハ加藤太助船田次郎ハ勝井十三江口十作ハ安井五八櫛山弥助ハ平山兵助山中一郎ハ山本一助と假か稱し各四國か遁逃せるゝ其中中島甲藏横山萬里山中一郎の三名ハ一度鹿兒嶋縣下か赴き居身潛伏せしうどを探索最も嚴かるふぞ此地を去りて高知縣か到らんと夜を犯し他眼を避けて宮崎縣下か着せし以を新平次郎桂五郎又吉村吉萬里の六名か出會せり此時江口十作の名を記せす惟ふらくハ江藤か隨行せしおらんハ故か互か無事を祝し是すう九人同船し同月十五日愛媛縣下宇和嶋か上陸し此か於て三名完三組か分ち路次を異か各

土佐ふ赴く程ふ鼎藏弥助一郎ハ前の如くに同行し不知案内の嶮岨を凌ぎ躁々たる深林ふ經て已ず隨意技路をたどる進むあるバ遅るゝあり故ふ先途の一郎弥助ハ了ふ鼎藏を看失ひ暫し株ふ腰うちゝけ憩ひかゞらふ待てども来らず偖ハ中嶋吾輩と遥ふ遅れ技路を他方ふとりしからん止る地理を約せしゝらハ再會ふ遅速あるのミさるを安閑と待くらきバ樵夫獵師の目ふ羅り怪まれんと必定せり疾々去らんと月話つい身を起して

歩を促がさふ此程絶て睦に附らず殊更宇和島より此地ふ來るまで夜ル日ふ継ぎ剩さへ一飯をも食せざれバ飢餓迫り氣力撓みて今ハ歩行自由を得ず夜陰山林石崛ふ露宿し稍くふして二十二日高知縣下幡多郡橘川村まで来りし所當縣の捕吏斯と看咎め忽地ふ逮縛せり偖も中嶋鼎藏ハ弥助一郎を看失ひ獨行して此日愛媛縣下松丸町ふさしかゝるふ路傍ふ停止一個の邏卒疾と之ふ眼を配り笛笠ふ面部を覆ひ鳶帔ふ形容を纏ひし風体

如何も曲者と踪跡を蹈て追蒐来たり其姓名を質
問せしかば鼎藏驚怖の思ひを抱けど臆せる氣色
を面貌ふ顯ぜず偽名を告げて去らんとせるふ邏
卒行途ふ立塞がり不審の件々あるふより兎も角
も警視出張所まで來る可しと強て拘引なさんと
せるふ鼎藏今ハ是まで あり少四答一言ふも及バ
ずして驀地ふ馳出せを追まゞと微邏卒疾風の如
く追迫し帯たる一刀拔よりもやく擊て蒐るふ鼎
藏も心得たりと拔合せ一上一下虚々實々一往一

來奮擊突戰斯る所ふ鞭笛の音ふ應じて漸々ふ走
來る邏卒五六名鼎藏身休薄疵を負ひ戰ひ自由ふ
らざるうゑ應援數輩ふ爭ふ抗せん透を窺ひ闇夜
ふ紛れ山路をさして遁逃せるふ幸ふして追擊の
人音も聞へざれハ茲ふ一息歩を止め滴る血汐を
ふ咽喉を濕らし手巾を裂きて疵瘍を覆ひ月の傾
く方を目的ふ九折の嶮岨を凌ぎ曉天辛くして高
知縣下ふ着せしとハ路傍の標示ふ知られたり却
説香月桂五郎中嶋又吉横山萬里の三個ハ前ふ同

徒と路次を異ふし高知縣ふ赴く途中愛媛縣管下吉野ふて是も邏卒ふ看咎めらき強て拘留せらるる處深夜屯所の塀を踰へ一日夜兼程遁走し久禮浦ふ到りしふ不圖鼎藏ふ邂逅せしろバ此所より同船し浦戸を指して出帆せり高知縣廳斯と知りて捕吏を八方ふ手分ふし其中山本檢部等も渠が蹤蹟を追逐し三月廿三日土佐郡種崎町ある逆旅家森田友七郎方ふ着せるふ天ふる哉四名の逆徒も亦茲ふ在り然而已ならず山本檢部も茲ふ來れバ四賊駭嘆天を仰ぎ捕吏の糺問ふ應じて速ふ其桂五郎又吉萬里鼎藏ふることを陳白し且曰我輩此期ふ臨み天命の歸るを覺れバ毛頭遁るゝ所存ハ毫らふ無ど聊縣廳ふ歎願の旨あ也ば明朝まで就縛の猶豫あらん事を冀望せと真實しやうふ乞ひつつも時間を延し一名其坐を退きて兼て主個友七郎ふ屬せし艤ひを促せ程ふ幾干もなく應援の捕吏相踵で郡參し竟ふ四賊を捕縛せり去程ふ江藤主僕ハ一度宇和嶋ふ着せと雖茲ふも足を止め難

く直ちに此所より乗船し三月廿四日といへるに浦戸より上陸ふし東方をきして奔走し同二十八日の黄昏甲浦に到りしらば今霄の宿所を定めんと同地の番人浦正亂を欺きて副戸長濱谷清澄の家に案内させ其身岩倉卿密事探索の命を蒙り竊に主張せし者と詐り一泊を依頼まるゝそ清澄心中惟らく是おん前に寫真を以て布達あり佐賀の巨魁江藤主僕に必定せりと微細を糺さゝ崇敬し同所の逆旅に請待し此旨斯と出張所に忠告せ

り此期高知縣廳より當地に派出ありとて細川少属併に捕吏川野鋏馬石木繁善其他番人北川信通岩崎義定の數名不時に馳付け同廿九日の拂曉該地の士族若干を募り置き新平主僕を戸長の家に聯し寄せ直ちに捕縛を遂たり〻新平始めは氏名を偽り其實を吐露せざりしも終に自ら名乗りとそ此間一封の書翰を出し竊に副戸長濱谷に託し之を郵便に附せんを乞ふ清澄陽に諾ひつゝ収て細川少属に呈しなれば細川之を得て而後本

江藤主僕甲浦戸長の家ふ捕縛せらるゝ図

廳ハ逓送せり其封簡左の如し

東京ニテ
岩倉右大臣殿
急専用　　請弁

斯て江藤主僕甲浦より高知縣廳まで護送せらるるの路次之を観る者群をなし或ハ譏り或ハ嘆ト嚷貶毀譽の各心ハ喋々囂々口善悪なく里聲の大耳ハ入らざるも江藤ハ獨り竹轎の透より虚空をうち望

ゆるるあり時ちなりてつひにすきを

得をも怨む人ぐ絶このまま

斯口吟て過さうれるとて時正ハ四月十三日完徒の處刑決定し佐賀縣ハ於て江藤嶋の両氏を始め其他十名死刑ハ處せらるる其餘軽重ハ仍除族懲役等の審判ありて九州全く鎮静ハ及びしかバ征討總督伏見の宮内務卿ハ先駐して龍驤艦を解艦ありて凱旋を奏し給へバ輦下を始め全國の民心安堵の思ひをかし續きて内務卿歸府ありしかバ喪

歓喜悦の眉をひらき御代萬歳を鼓腹ふ合ー各地
毎戸ふ首唱ーするハ是ぞ皇統一系たる不易の國
威と知られたり

佐賀電信録下之巻

○佐賀縣兇徒處刑告標併ふ辭世の詩歌

江藤新平　四十一年

嶋義勇　五十年

其方儀不悍朝憲名を征韓ふ托ー黨與を募り兵器を集め官軍ふ抗敵ー逆意奴逞せる科ふ依て除族の上梟首申付ル

朝倉尚義　三十一年　香月桂五郎　二十五年　山中一郎　二十五年

西義質　中島鼎藏　二十七年

右征韓

副島義高　四十五年　重松基吉　五十一年　村山長榮　清藏

福地常影　　中川義純

右憂國

其方儀不憚朝憲名を征韓憂國に托し江藤新平嶋義勇の逆意を佐け官軍に抗敵する科に依て除族の上斬罪申付る

はすの露をの淡も袖に去りけり

君が代に名を江藤

玉代おもふ人さそふ武士の

さくらつくしの袖に涙　同人

ゆふ波の常ん伊勢の榊を五百枝

筑島の濱に就て死出とハ　西義質

村山勇藏

却為逆賊上刑場　誰憐海内志士腸

莫道從容沉黙了　七生殘恨附勤王

山中一郎

苦學多年業未成　一朝謀敗死素輕

二十五年如一夢　誰使後人繼我誠

副嶋義高　何況七生出人間

死爲雷霆不可得　大義不動有如山

若使後人知我意

○佐賀縣戰爭に甘官軍の死傷凡三百三十七人程其内死者九十九人賊徒の戰死凡二百五十名なる由又二月十五日十八日廿二日の戰ふて熊本鎮臺へ小倉縣元豐津より出兵せし内ふて戰死大池大尉澤田中尉溝部少尉其外十七名疵傷奥大尉其他六人程ありしと云且柳川の病院ふ入る傷者四名福岡病院より入る傷者五十六名内賊徒一名役夫一名但し箱崎招魂場官軍戰死の墓三十二内福岡縣貫屬九名ありと云

餘話追加

○佐賀凶徒處刑の後該地ハ更ふり東京ふ寄寓せる父母妻子等憂苦欝陶の情ふ堪ざる者許多ある中彼の朝倉尚義彈藏の妻ハ同縣士族某の女ありし女甫めて三歳其夫征韓黨ふ與類し事敗ふて斬ふ處せ妻囚音を聞く號泣淚潸然たること數刻奮然

突起し其夫平常愛玉所の七首を執り先其女兒を刺殺し又を反して自盡せりとぞ

○又曰同徒德久幸次郎の妻ハ東京濱町の市醫赤松元民の女なり嫁して來りて未一月あらず舉家縣小著く該縣下征韓黨の起るに際し其夫亦之に黨與し敗走して其踪蹟を知らず夫の兄之に再嫁を勸むるに淨泣固辭して曰ふ俟て夫の存亡を知りて後泰山の命を奉ずるも遲からざるなりと因て國辭三章を賦して以て舅姑に贈呈す

花と咲き紅葉と散きる世のさまにふさそそ松のみ名ゆるしきもうれあるそのの日ぞのり八歸り來て出でゆ君よをとづれもあり去る波あるバとこを捨て西の國へつもさそう夢よ春のうりぎ

○同縣紛擾の際長崎縣士族寺井氏の妻神妙の舉動をおせしを以て官之を賞せらるゝと左の文面の如し以て一美談とす

長崎縣管下第十二大區

竹松村居住士族

寺井亀太郎妻くゝ

其方儀先般佐賀縣騒擾ヨ付警備兵召募匆卒の際
丈亀太郎家事を抛ち一小刀を提げ會所へ馳付其儘編
隊廳下ヘ出張遂ヘ彼許より進軍の趣聞傳へ一小刀を
以て戰地へ向候儀安心難致依て夫の太刀を携へ
獨歩彼許へ馳付候處既ヘ進軍の跡ヨ付夜陰を侵し
遠路跋渉終ヘ武口ヘ於て追付右太刀を夫へ渡し候
趣畢竟朝旨を遵奉し夫婦の情誼を盡し候段實
ヘ士族の婦たるヘ不恥神明の事ヘ付屹度譽置候事

佐賀縣故大屬小出光熙本年二月會賊徒
之暴動遂死非命岩村前權令慨惜之餘建
石碑于佐賀是權大屬卷其之所作云

小出光熙斗南之人也天資沈敎自能耐事曩者前
權令岩村通俊舉為大屬余復用之率入于縣焉今
茲明治七年二月十又五日兇徒如雲乘夜襲擊砲
聲飛霹靂城砦為震動當是時彼衆我寡其勢有朝
不可以謀夕者焉雖然衆皆勇鋭奮而不顧且戰且
拒延至三日米塩俱竭硝藥竝殫寧待其亡不如擊
之也是以昧爽衝圍蹂躪而過尉官交仆光熙亦死

實同月十有八日也既而六師奏凱亂黨爭降叅復入城四顧久之燹餘塵堆血痕風腥求其首級齎之于京而其肢體埋之于此追懷且不已刻著其名于石焉年二十九嗚呼生任其責死見其節縱不自慶亦不慨惜也哉

明治七年五月上澣

佐賀縣權令正六位岩村高俊

名山閣　東京芝大神宮前書舗　和泉屋吉兵衛發售

大阪　河内屋喜兵衛　東京　須原屋茂兵衛
同　伊丹屋善兵衛　同　山城屋佐兵衛
同　敦賀屋九兵衛　同　小林新兵衛
同　秋田屋太右衛門　同　丸屋善七
同　河内屋茂兵衛　同　和泉屋市兵衛
同　河内屋和助　同　須原屋伊八
同　秋田屋市兵衛　同　出雲寺萬治郎
西京　出雲寺文次郎　同　梳屋喜兵衛
同　村上勘兵衛　同　近江屋半七
同　勝村治右衛門　同　長門屋龜七
同　杉本甚助　同　三家村佐平